

尊き人の陰陽

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

自身の初期衝動の原動力

私はしばしば他の方から、「フットワークが軽い」「バイタリティがある」などと評価していただくことが多い。自分ではあまり自覚はないのだが、たしかに障害児支援のみならず教育活動や研究活動など、振り返っていれば多様な仕事を積極的にしている。その振る舞いの原動力は様々なもので構成されていると考えているが、そもそも「なぜそれほどまでに対人援助に関わる活動に関わるのか？」という自身の初期衝動を考えた時、一つの作品、ひいては1人の作者が確実に影響していることを思い出した。それは「からくりサーカス」であり、その作者である藤田和日郎氏である。

人の陽のきらびやかさ

「からくりサーカス」とは、1997年から2006年まで週刊少年サンデーで連載されていた冒険活劇といったジャンルの漫画である。莫大な遺産を相続したことによって命を狙われることとなった主人公が、拳法家の青年や人形使いの女性と共に、数奇な冒険を辿るという、文章だけだと想像し難い内容である。群像劇のような物語の構成をしており、話が進むごとに、物語の主軸となる人物が立ち替わり、だからこそそれぞれの登場人物の背景や心情が詳細かつ熱を持って語られている。

本作品は全43巻あり、数多くの登場人物と関連エピソードがあり、作品の魅力をつぶさに伝えようとすると誌面に収まりきらないほどである。ただ、乱暴なまとめではあるがそれぞれの登場人物やエピソードに通底するテーマは、「人間愛といった人の陽の側面を、清濁あわせて激烈に描く」ことのように感じる。それぞれの登場人物の動機は様々だが、多くの場合に共通するのは友情や愛といった人の営みの根源たるものから由来している。詳細はあえて伏せるが、いわゆる黒幕、ラスボスの動機すらも、ある側面で純粹無垢な”愛”なのである。誰かを愛し、愛されたい、同性間や異性間、あらゆる愛を求め、求められる、その行動原理の現れたるエピソードが、私にとっては人の生、陽の部分のきら

びやかさとして頭に残っている。そして同時に、そういったきらびやかさに憧憬の念を抱くようになったきっかけでもあると、振り返ると思う。

人の陰の清々しさ

上述した”愛”といった陽の部分は、容易に”憎しみ”や”執着”といった陰の部分にも通ずる。「愛の対義語は無関心である」という言説は、みなさん聞いたことがあるだろう。一方、「憎しみは愛と表裏一体である」という言葉こそ、本作品に通底する2つ目のテーマのようにも思える。上述したラスボスの動機は純粋な”愛”である。ではなぜ、悪の象徴たるラスボス的な役割となってしまうているのか。それはその愛を叶えるため、ただその一念を純粋に、決して諦めず、必ず叶うと信じて行動して”しまった”ためである。詳しくは作品を読んでいただきたいが、下記の画像にある「夢はいつか必ず叶う」という古今東西あらゆる作品で金科玉条のように紡がれる言葉が、本作品ではことさら特別な意味を持つ。それは、清々しさを感じるまでの人の陰の部分の体现である。ラスボスは、愛は必ず報われるという夢を信じて、筆舌に尽くし難い悪行を、純粋に実行するのである。



からくりサーカス第14巻より抜粋（藤田和日郎, 2018）

人の陰陽の尊さ

私は本作品を通じて、人の陽と陰の部分は表裏一体であり、不可分であり、清濁が合わさり、故に人を強く惹きつけるのではないかと、読んだ当時感じたことを記憶している。だからこそ、対人援助を实践する上で、対象児やその家庭の陽の部分だけでなく、陰の部分もまた、評価するのではなく丁重に、尊重すべきだという考えに至っている。人の陽の部分だけでなく、陰の部分、むしろ陰の部分があるからこそ、人の尊さがより色濃く浮かび上がってくるように思う。本原稿を書くにあたって久しぶりに「からくりサーカス」を読んだが、いまなお、私の対人援助観をリポートしてくれる作品であることを改めて実感した。

—つづく—